

とりなし

「そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、
願いを求めた。」(ダニエル書9:3)

聖書で言う「とりなし」とはほかの人々の必要のために忠実に、続けて、特に神にお願いすることで、その状況に介入するように主に訴える祈りである。ダニエル書9章のダニエルの祈りはとりなしの祈りで、同胞のユダヤ人と一つになって祈っている。そして人々の罪を告白し神に赦しを求め、エルサレムと民族の回復を訴えている。聖書にはキリストのとりなしや聖霊のとりなし、旧約聖書と新約聖書の中の神を敬う多くの人のとりなしが記録されている。

キリストと聖霊のとりなし

(1) 主イエスは地上で働いておられたときに霊的に失われた人々(神との個人的関係がなく、神の目的に従っていない人)のために祈られた。それはその人々を「捜して救うために」来られたからである(ルカ19:10)。主は神に背くエルサレムの町に入るときに悲しんで涙を流された(ルカ19:41)。また弟子たち個人(→ルカ22:32)や全体(ヨハ17:6-26)のために祈られた。十字架にかけられて死ぬ間際には敵対する人々のためにも祈られた(ルカ23:34)。

(2) キリストの現在の働きは御父である神に私たちのとりなしをすることである(ロマ8:34, ヘブ7:25, 9:24, →7:25注)。ヨハネは主イエスを「御父の前で弁護する方」(→1ヨハ2:1注)と呼んでいる。私たちの救いと神との関係の継続のためにはキリストのとりなしが必要である(⇒イザ53:12)。キリストの誠実な祈りを通して神の恵み(受けるにふさわしくない好意と慈しみ)とあわれみと助けが与えられなければ神との関係は壊れてしまう。そして私たちは神から遠く離れ、再び罪の奴隷になってしまう。

(3) 聖霊もまたとりなしをしてくださる。パウロは「私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ」(ロマ8:26, →8:26注)と言っている。聖霊はキリストを知っている人の霊を通して「神のみこころに従って」(ロマ8:27)とりなしてくださいませ。つまり聖霊は神の目的と完全に一致して御父である神と話をされるのである。したがって主イエスは信仰者のために天からとりなしをされ、聖霊は地上で信仰者の心の中からとりなしをされるのである(→「聖霊の働き」の表 p.2187)。

信者のとりなし

聖書はしばしば神の民のとりなしの祈りについて書いていて、著しく力強い祈りの模範を多く記録している。

(1) 旧約聖書では王(1歴21:17, 2歴6:14-42)や預言者(1列18:41-45, ダニ9:)や祭司(エズ9:5-15, ヨエ1:13, 2:17-18)が神の民のためにとりなしの祈りを導いている。旧約聖書のとりなしの祈りの中で顕著な例としてはイシュマエル(創17:18)とソドムとゴモラのための(創18:23-32)アブラハムの祈り、子どもたちのためのダビデの祈り(2サム12:16, 1歴29:19)、子どもたちのためのヨブの祈り(ヨブ1:5)などが挙げられる。モーセの生涯には旧約聖書のとりなしの祈りの力を示す優れた模範がいくつかある。モーセは何度も神の選民のいのちと未来のために神に嘆願した。たとえばイスラエル人が主に逆らって、カナン地に入ることを拒んだときに神はイスラエル人を滅ぼしてモーセから偉大な国民を起こすとモーセに言われた(民14:1-12)。そのときモーセは祈りの中でそのことを主に持って行き、人々のために訴えた(民14:13-19)。その祈りの終りに神は「わたしはあなたのことばどおりに赦そう」と言われた(民14:20, →出32:11-14, 民11:2, 12:13, 21:7, 27:5, →「効果的な祈り」の項 p.585)。そのほかにも旧約聖書にはエリヤ(1列

